

## 神戸女学院史料室記事

世相の動乱にもかかわらず史料室の一九九〇年度はいとも平穩無事に過ぎてゆくかに思われた。ところがいよいよおしつまつた三月末、全く思いもよらなかった大変動がやってきた。――史料室長の交替は、その経緯を諒解するのにそれほどの労力を要することではなかった。大変なことはこれと踵を接してやってきた。それを単純に「現象」として述べるならば、職員の変動と学院内の機構組織の組み換えということになるが、どちらが先立したのか、その理念は何であるのか、今だに私には諒解がつかない。ともかく、史料室待望の専任職員第一号であった石村姉が学長秘書に抜擢され、職員のいなくなった史料室に、同じグリーンウッド館に仕事場を構えていて、こちらは室長の定年退職に遭遇した調査室を合併させるというお達し。史料室職員の欠けたところは調査室の職員によって補われるべしとのことのようにであった。幸いに調査室の嘱託職員の寺西姉は、すでに学生時代から課業外の仕事として史料室に関わってきた人で、誰にでも耐えられるわけではない煩瑣な作業を代々の史料室職員方と同様にむしろ喜んで引き受けてつとめているが、勤務時間の少なさは如何ともしがたく、一九九一年度の史料室業務は、後述するように史料室関係の仕事が学院の内外で交流の度を深めてきたこと（これは関係者としては、励みともなる嬉しいことなのだが……）と相俟って、停滞することが多かった。

史料室の仕事をもっと喧伝せよというお勧めをいただいた。寺西姉が週四日の出勤日の半分と休日の一日をさき、アルバイトの栗木姉が週二日、西尾姉が週一日を供して携わっている通常の仕事は、まず史料の整備。『学院史料』によってお目にかけられるようなまとまったことをする以前に、史料たるべきものを集め、分類し、ファイルに収め、目録を作る。破れかかった紙類の手当や史料コピーの製本もする。また貴重な史料ではあるが使い勝手の悪い文書類の索引や抜き書きを作る。宣教師文書の訳出註記もこの種のことで、「単なる翻訳」であるとは誰も考えていない。そしてこれらによって各方面からの照会事項に答える。今年度の照会件数は二〇を超えた。

史料室の外部との関わりは、このような照会の御縁によるもののほか、西日本大学史担当者会や同志社大学人文科学研究所の宣教師文書研究の活動によって一層広いものとなった。大学史の会は一九八九年に発議され、一九九〇年に規約を作って発足した。中部以西の長い歴史を持つ大学の大学史担当者たちが互いに啓発し合うための集まりというべきか。同志社、関西学院、梅花学園、桃山学院、関西大学が幹事校としてお世話下さっているが、来秋の例会時には関東地区大学史連絡協議会の入洛があるとのことで、合同の集会が計画されている。宣教師文書の研究の方はこれも一九八九年、石村姉と若山が研究補助者の委嘱を受け、来年度は寺西姉にもお誘いをいただいている。米国伝道会の歴大な史料は多少の分担をしてなお余りある程なので、これは意義ある共労と信じられる。

（若山 晴子）